津和野町埋蔵文化財報告書

高田地区埋蔵文化財
分布調査概要報告書Ⅱ

1992

津和野町教育委員会

高田地区埋蔵文化財
分布調査概要報告書Ⅱ

1992

津和野町教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成３年度に国、県の補助金を得て津和野町教育委員会が実施した埋蔵文化財分布調査の概要報告書である。
2. 調査を実施した地区は、島根県鹿足郡津和野町大字高峯（たかみね）、通称高田（たかた）地区である。
3. 調査を実施した遺跡は、高田（たかた）遺跡である。
4. 調査にあたっては、下記の方々にご指導いただいた。

　　島根県教育委員会文化課管理指導係長　　川　原　和　人　氏

　　津和野町文化財保護審議会会長　　鈩　川　兼　光　氏

5. 本書に用いた方位は、遺跡分布図およびテストピット配置図は真北を示し、その他は磁北を示す。
6. 本書中に用いた記号ＴＰは、テストピットの略号である。
7. テストピット実測図のスケールは、1/40である。また、遺物実測図のスケールは、土器は1/4、石器は1/2である。
8. 写真図版中の遺物番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。
9. 調査によって作成された記録類および出土遺物は、津和野町教育委員会に保管されている。
10. 調査の体制は、下記のとおりである。

調査主体	津和野町教育委員会	教育長	山根津知夫
調査指導	島根県教育委員会		
事務局	津和野町教育委員会	教育次長	山本朋子（～平成3年5月）
			竹下宣孝
	〃	文化財係	長嶺常盤（～平成3年5月）
			広石　修　　北浦弘人
調査担当者	〃	文化財係	北浦弘人

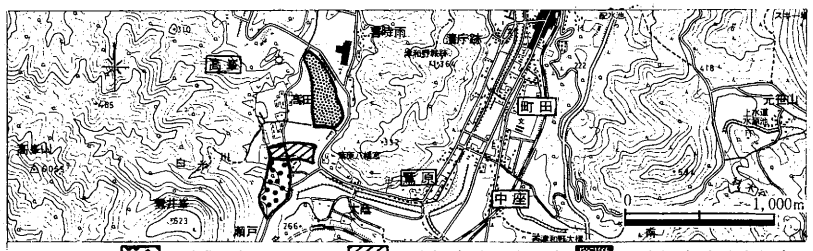
Ⅰ．調査にいたる経緯（第１図）

津和野町では、昭和52年度以来町内各所でほ場整備事業が実施されてきた。埋蔵文化財の保護と事業計画の調整については、それまで分布調査の実績がなく、遺跡の周知化は、郷土史家岩谷建三氏（故人）の精力的な資料の蓄積に頼るのみであった。津和野町教育委員会では、ほ場整備事業計画の策定後、事業主体者である津和野町土地改良区と、埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねてきたが、このような状況においては、調査資料の不備は否めないものであった。早急に事業計画地内の埋蔵文化財について、より詳細な分布状況を把握し、保存についての措置を講じる必要性が生じた。当初は、島根県教育委員会、山口・島根両大学にご助力いただき、分布調査を実施してきたが、平成元年度に埋蔵文化財担当職員を配置するにいたって、町として対応できる体制を整えることができた。

昭和63年度に島根大学考古学研究室によって表面踏査を実施していただき、広範囲にわたる近世の遺物散布が確認された。これを受けて平成元年度以降今年度まで毎年約3haを対象として分布調査を実施してきた（第１図）。今回の分布調査は、津和野町教育委員会の直営事業として、国、県の補助金を得て実施した。調査は、事業計画を勘案しながら合計28ケ所のテストピットを設定して行い、試掘総面積は、198㎡となった。

調査に際して、以下の方々のご協力を得た。記して深謝いたします。

土地所有者	三浦　芳一	野村　　満	野村　　誠	三浦　健志	三宅　広善
	倉益　増衛	三宅　　勲	羽山　　尋	河野　　昇	堀　　亀善
調査協力	舛成　義一	石井　信義	三宅　キク	三宅　晴子	下森寿美子
	河野里五郎	舛成　米子	河野　福江	羽山　　尋	河野　武男
	三浦千鶴子	長嶺三千子	三浦　芳枝	三宅　弘子	堀　トミル
	河野　　実	三浦源太郎	河野八重子	野村　好江	米本　　潔
	岡　　伯明	兼子　和恵	河野八重子	三浦リヨ子	中島　由紀
	村上　文子	田島　正憲	堀　　早苗	津和野町土地改良区	



←平成元年度分布調査　←平成2年度分布調査　←平成3年度分布調査

第１図　高田地区における分布調査の状況

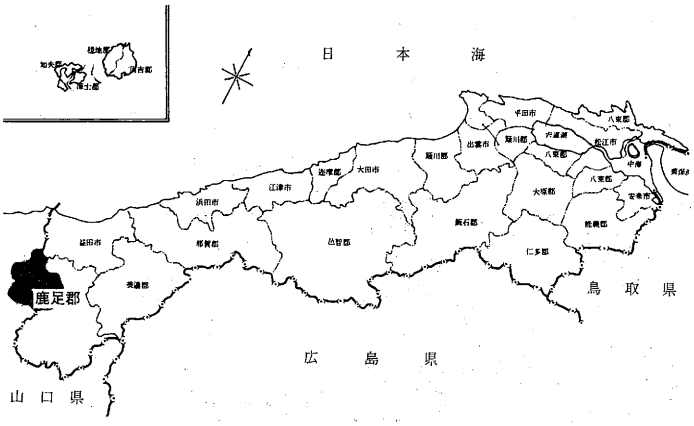
Ⅱ．調査地の位置と歴史的環境（第２図～４図）

津和野町は、面積139.4K㎡、人口約 7,000人を擁する山陰屈指の観光地である。島根県の西端部に位置し、鹿足郡に属する。県都松江市とは、直線で約 160㎞の離隔があり、町域の西側では、山口県と県境を接している（第2図）。白山火山帯の西端にあたる青野火山群の造山活動は、標高989.2mの十種峯や907.6mの青野山などの高峰を育み、当町の地勢形成に大きく関与している。町域を大きく蛇行する津和野川は、中国山地西部の山並みに狭長な谷間を刻み、津和野町に隣接する日原町で高津川と合流し、益田市沖の日本海に注いでいる。西石見地方の歴史は、この高津川水系によって育まれてきたと言える。

もと石見国鹿足郡能濃郷と称した津和野の歴史は、現在までのところ、縄文時代の早期まで溯ることが確認されている。高田遺跡（第3図1）から早期の押型文土器を伴う土坑が検出されているほか、山崎遺跡（第3図15）からも押型文土器が出土している。高田遺跡からは後期の土壙墓も確認されており、また隣接する大蔭遺跡（第3図3）からは、後期後半の西平式土器や当該期の石器類が多量に採集されており、ほぼ単一の時期を示す土器相により、一大集落の存在が想定されている。

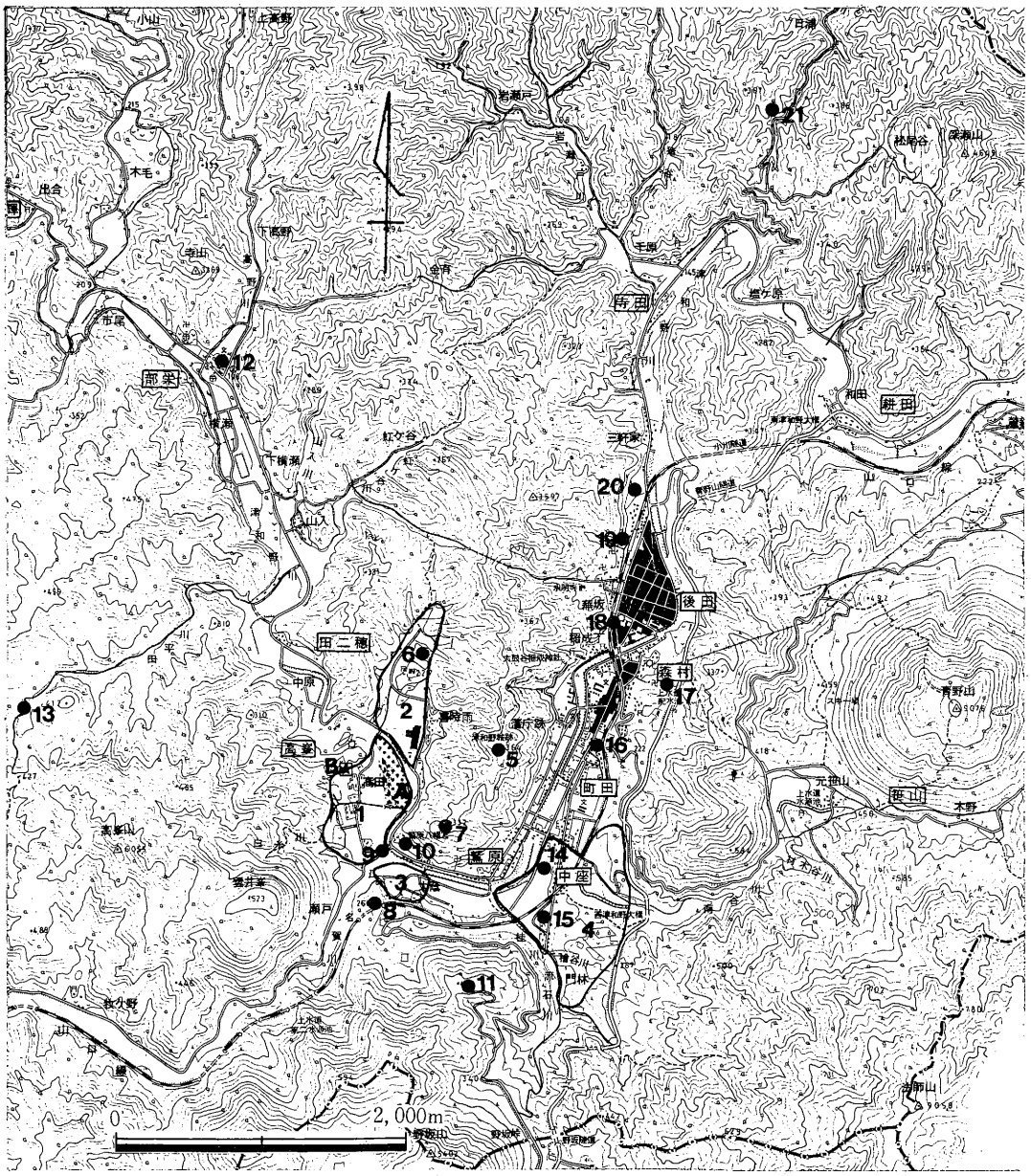
弥生時代においては、高田遺跡や山崎遺跡、西中組遺跡（第3図14）で後期後半以降の土器が確認されている。高田遺跡では当該期の竪穴住居や土器棺墓が検出されており、また山崎遺跡でも当該期の竪穴住居が確認されている。この時期、防長地方の素縁、山陰地方の複合口縁の両者の土器がみられ、陰陽両地方を結んでの盛んな人々の往来があったことが偲ばれる。

現在のところ津和野町内で確認されている古墳は、木部地区の鍛冶原古墳群中の5基のみである。未調査であり詳細は不明だが、主体部は横穴式石室であるとみられる。高田遺跡や中座遺跡群（第3図4）で古墳時代の土師器、須恵器が多数出土しており、これらの周辺に古墳が存在する可能性は高い。



第２図　津和野町の位置

13世紀以前の津和野の歴史については文献資料が存在せず、唯一考古学的な検証によって辿ることができる。高田遺跡では奈良、平安時代の須恵器、土師

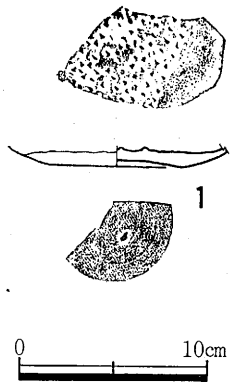


第３図　高田遺跡周辺遺跡分布図

1. 高田遺跡　2. 喜時雨遺跡　3. 大蔭遺跡　4. 中座遺跡群　5. 津和野城
6. 要害山砦　7. 中荒城　8. 茶臼山城　9. 伝吉見民部墓（宝篋印塔）
10. 鷲原八幡宮　11. 陶晴賢本陣跡　12. 横瀬遺跡　13. 田平の至徳3年銘宝篋印塔
14. 西中組遺跡　15. 山崎遺跡　16. 森遺跡　17. 丸山遺跡　18. 山根遺跡
19. 伝吉見正頼夫人墓（宝篋印塔）　20. 伝吉見頼行墓（宝篋印塔）　21. 日浦遺跡

器が多量に出土しているほか、緑釉陶器や皇朝十二銭の一種、承和昌寶(836年初鋳)が検出されている。当地が古代の西石見地方の重要な拠点であったことは想像に難くない。

弘安5年(1282年)の吉見頼行入部以降、吉見氏による領地経営によって津和野は政治・経済の中枢としての体制を整え、慶長5年(1600年)の関ヶ原の役後16年間の坂崎直盛の治領、亀井氏の幕末に至るまでの藩政時代を通じて、城下町として繁栄した。近年発掘調査によって、中、近世の様相も考古学的に徐々に明らかになりつつある。



第4図 調査地表採遺物

高田遺跡では、16世紀代の掘立柱建物群が検出され、吉見時代の武士団集落の居館跡と推定された。青磁、白磁、染付磁器などの輸入陶磁器類のほか、日常雑器として多数の土師器、瓦質土器が出土しており、往時の生活を偲ばせている。遺跡の一部には、金属製品の生産工房と思われる一画があり、鉄釘や、金銅製の釘隠し用化粧板などの建築部品のほか、鉄鏃や鎧の小札、鉄砲の玉などの武器、武具類が多数出土している。この工房遺構に付随すると考えられる祭祀遺構も検出され、その手厚さから推しても、政治、経済、軍事の重要な拠点として、高田遺跡が機能していたことが推察される。高田地区の南東部には、応永12年(1405年)遷座と伝えられる鷲原八幡宮(第3図10)が所在するほか、周辺の丘陵上には津和野城(第3図5)の支城である中荒城(第3図7)や茶臼山城(第3図8)が築城されている。また吉見民部の墓と伝わる宝篋印塔(第3図9)が存在するように、高田地区の周辺には中世の名残が散見しており、吉見氏の本拠地の一画をなしていた可能性がある。

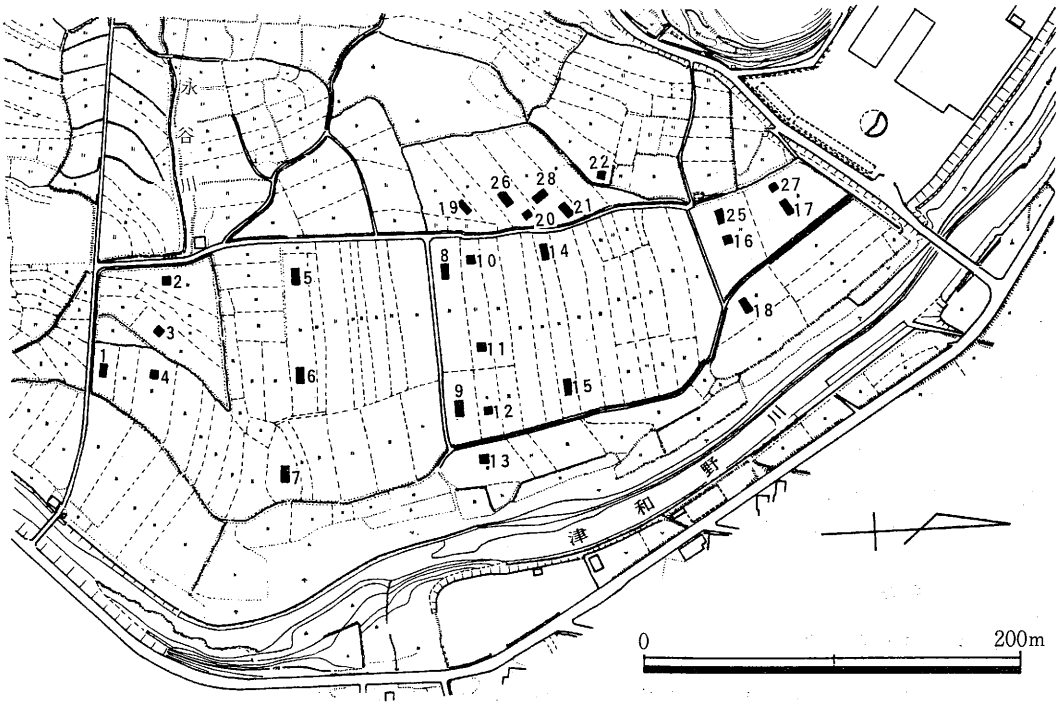
今回の調査地(第3図A、B)は、高田遺跡内に位置する。津和野川とその支流名賀川によって形成された氾濫原に立地し、標高523mの雲井峯の山麓にあたる。従来鴻寄遺跡と称されてきた遺物散布地を範囲に含んでおり、近世の陶器片(第4図1・卸皿)や須恵器片の表面散布が確認される地帯である。

Ⅲ．発堀調査の概要

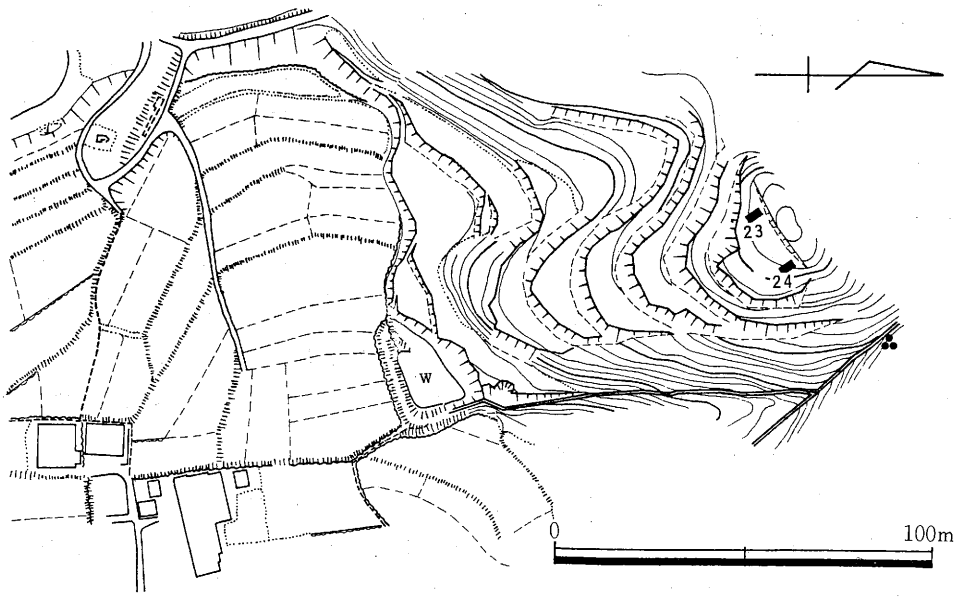
1．調査の方法と経過（第3、5、6図）

発掘調査は、前述のとおり今後予定される開発計画の調整資料を得るための試掘調査という基本的な性格のため、遺構の存在確認と遺物の包蔵範囲の把握を主眼として行った。調査対象地は、津和野川の氾濫原上に立地するＡ区と、高峯山（たかみねやま）から東北東に延びる小支丘上に立地するＢ区に分けられる（第3図Ａ、Ｂ）。

Ａ区（第5図）は、従来鴻寄（こうより）遺跡と称され須恵器の遺物散布が確認されている一画を含む。丘陵の延長部分で尾根状の微地形上にあたる部分に、特に遺物の散布が顕著である。今回はその縁辺部に、集中的にテストピットを配置し、遺跡の広がりを追求した。また、氾濫原における遺物の散布状況の把握に努めた。テストピットは、約40～80ｍの間隔をおき、概ね調査地を東西方向に横断する形で設定した。当初はＴＰ－1～22を設定したが、調査地が氾濫原にあたり、出土遺物が流れ込み遺物か否かをさらに詳細に把握するため、ＴＰ－25～28を追加設定した。結果的に遺構を確認できたのは、ＴＰ－22のみである。他のテストピットの状況はほぼ一様で、氾濫堆積によるシルト層で厚く覆われていることが確認された。



第５図　　Ａ区テストピット配置図



第６図　　Ｂ区テストピット配置図

ただし遺物の出土状況には粗密があり、ＴＰ－21、26、28では特に集中して須恵器の出土をみた。Ｂ区（第6図）は、大半を牧草栽培のため段状に削平されており、原況を留めていない。頂上部分にＴＰ－23、24の2ヶ所のテストピットを配置したが、遺構、遺物は検出されなかった。Ａ、Ｂ両区を通じ、各テストピットごとに遺物出土状況の写真撮影を行った後、層位ごとに遺物を取り上げた。また、土層断面セクションの写真撮影、実測を行い、遺構を確認したテストピットについては、遺構検出状況写真の撮影後、平面図を作成した。調査後は、完掘状況写真の撮影後、すべてのテストピットについて埋め戻しを行った。なお、調査期間中度重なる雨に見舞われ、一部テストピットが冠水し、排水作業に手間取ったことを記しておく。現地調査は、平成4年1月から実施し、同年2月に終了した。

2. 調査の概要

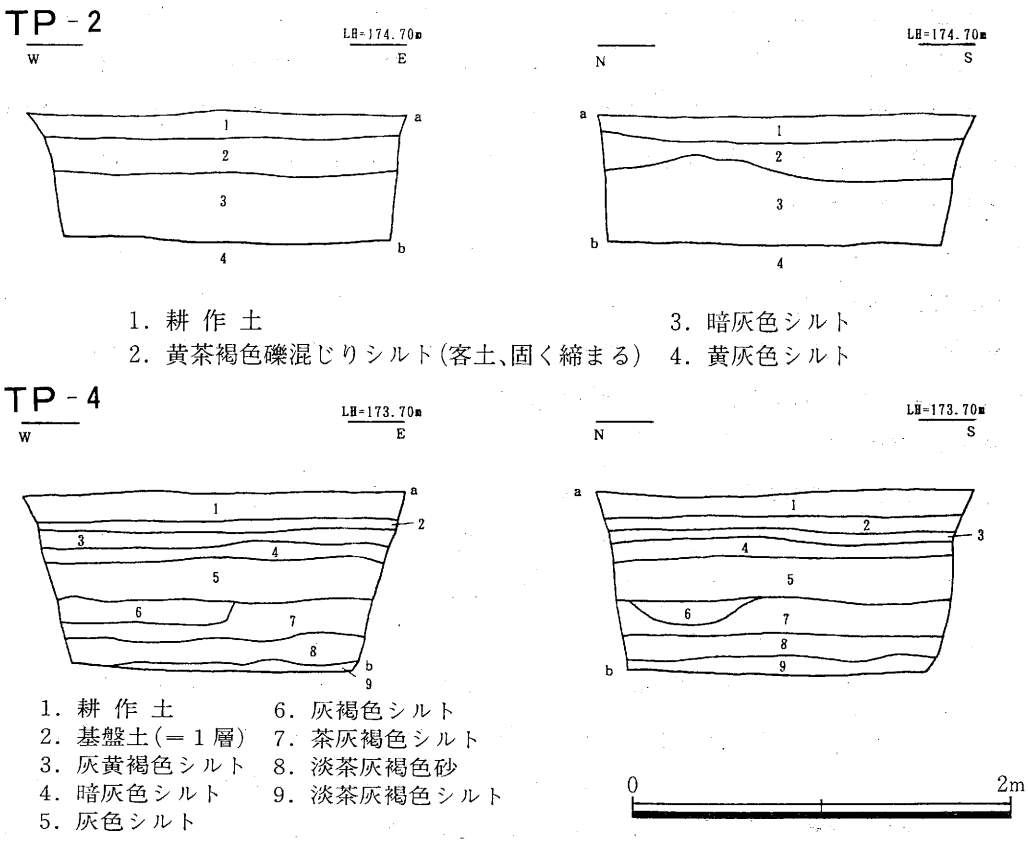
(1) Ａ区の調査（第5図）

高田集落の北東部分、津和野川の西側に広がる水田地帯が対象地である。現況では標高173～177mの間に位置し、最高位のＴＰ－22から最低位のＴＰ－1までの直線距離約280mの間の比高差は3.2mと、平坦地が広がっている。標高176m以下に位置するＴＰ－22以外のテ

ストピットでは、氾濫堆積によると思われるシルト層や礫層が確認され、流れ込みと思われる遺物の出土はみられるものの、遺構を確認するにいたらなかった。調査区の南部、ＴＰ－1～7付近に西方から流れ込む永谷川（えいたんがわ）は、小河川ながら近年まで氾濫を繰り返してきており、またＴＰ－13付近から津和野川の護岸が決壊し、調査区のほぼ全域が氾濫にさらされたことが幾度もあったと聞く。遺構の遺存が困難な状況にあったものといえよう。ＴＰ－22を設定した田地は、ＴＰ－21、28の位置する田面より急激に高くなり、その比高差は約1mを測る。このテストピットからは、柱穴状の落ち込みなどピットが検出されており、これより北西側に遺跡地が広がる可能性が高い。この一帯が従来の鴻寄遺跡にあたる。ＴＰ－21、26、28付近では遺構を確認できなかったが、多量の須恵器を包含する暗灰色シルト層が広がっており、ＴＰ－22側からの流れ込みと判断された。

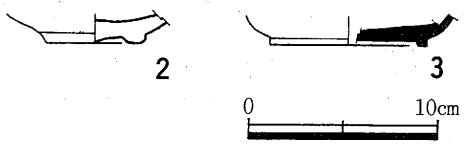
ＴＰ－1

標高173.1mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。今回調査範囲の最南端に位置し、最低位にあたる。層位は、1層－耕作土、2層－橙褐色粒を含む暗灰色シルト、3層－暗



第７図　テストピット実測図（ＴＰ－2・4）

灰褐色シルト、4層ー灰色シルト、5層ー黄灰色シルトである。 2層は客土と思われ、その下層、地表下約37cm以下は氾濫堆積層である。遺物は、 3層及び 4層から磁器片、土師器片、須恵器片が微量に出土した。遺構は検出されなかった。



第８図　ＴＰ－2出土遺物

ＴＰ－2（第7、8図）

標高174.3mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。2層は客土と思われ、その下層3層以下は氾濫堆積層である。遺物は、2層から陶磁器片、3層から陶器、須恵器が若干出土した。第8図は、3層からの出土遺物である。2は陶器の底部である。内面にのみ淡緑灰色の釉薬がかかり、外面は露胎している。3は須恵器の坏である。遺構は検出されなかった。

ＴＰ－3

標高173.7mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。層位は、1層ー耕作土、2層ー基盤土、3層ー黄橙色粒を含む灰褐色シルト、4層ー灰色シルト、5層ー黄灰色シルト、6層ー茶灰色シルト、7層ー暗茶色シルト、8層ー青灰色シルト、9層ー砂粒混じり橙灰色シルト、10層ー暗灰色シルトである。3層は客土と思われ、その下層、地表下約30cm以下は氾濫堆積層である。遺物は、2層から土師器片、瓦質土器片、陶磁器片、4層から土師器片が若干出土した。遺構は検出されなかった。

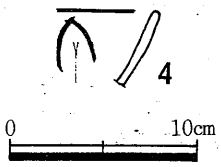
ＴＰ－4（第7図）

標高173.2mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。3層は客土と思われ、その下層4層以下は氾濫堆積層である。遺物は、3層から土師器片、陶器片、4層から陶器片、5層から土師器片が微量に出土した。遺構は検出されなかった。

ＴＰ－5（第10図）

標高174.2mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。1、2層下に客土と思われる層は確認されず、3層以下が氾濫堆積層となる。遺物は、2層から土師器片、陶磁器片が若干出土した。遺構は検出されなかった。

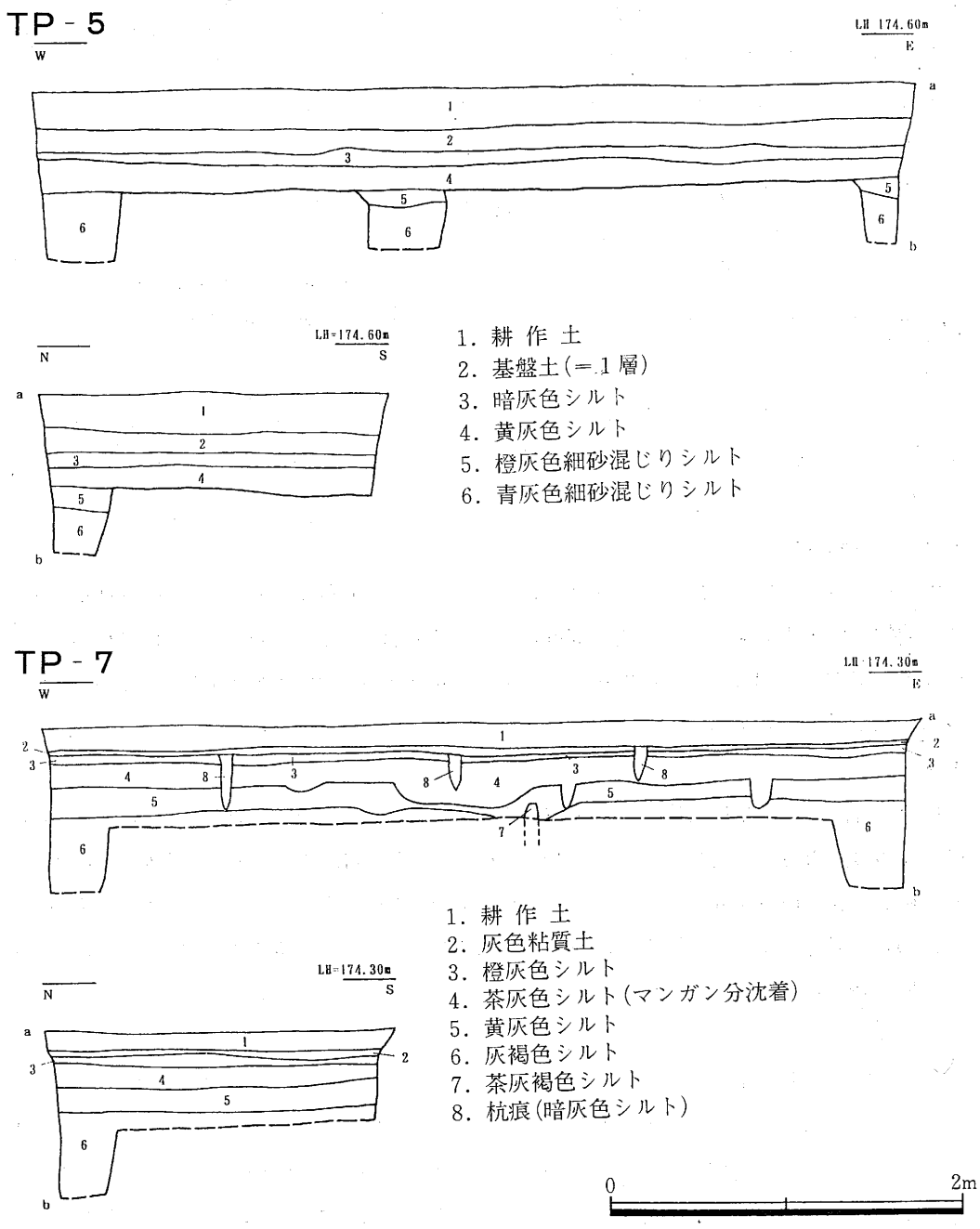
ＴＰ－6（第9図）



第9図TP-6出土遺物

標高174.2mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。ＴＰ－5と同一の田地内である。層位は、1層ー耕作土、2層ー基盤土、3層ー灰色シルト、4層ー黄灰色シルト、5層ー黄青灰色シルト、6層ー茶灰色シルト、7層ー青灰色シルトである。3層以下が氾濫堆積層である。遺物は、2層から土師器片、須恵器片、陶磁器片が若干出土し

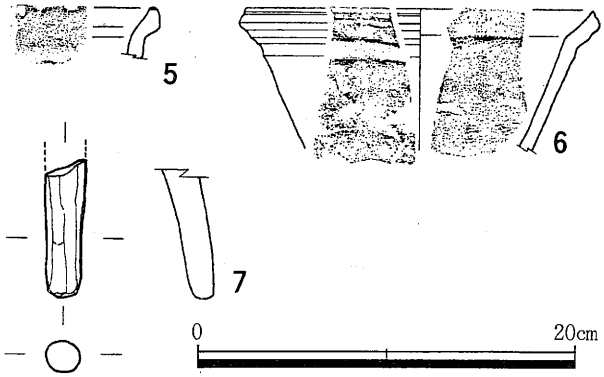
た。第9図4は青磁の碗である。鎬の鈍い蓮弁文を有するもので、釉の発色は青味を帯びた緑色である。遺構は検出されなかった。



第10図　テストピット実測図（ＴＰ－5・7）

ＴＰ－7（第10、11図）

標高173.9mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。3層以下が氾濫堆積層となり、5層上端のラインに氾濫流による顕著な乱れが認められる。3層上面から旧水田の杭が穿たれているほかは、遺構は確認されなかった。遺物は、3層から土師器片、陶磁器片、4層から土師器片が若干出土した。第11図は、4層からの出土遺物である。5、6は土師質の鍋である。5は、口縁端部に指頭による刻みがみられる。6は、口縁部に1条の沈線が施されており、外面は指頭により粗く調整され、内面は比較的丁寧にナデられている。7は、土師質の足鍋の脚である。粗く面取りされている。



第11図　ＴＰ－7出土遺物

ＴＰ－8（第12図）

標高174.8mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。3層以下が氾濫堆積層となり、5層及び6層の上端のラインに氾濫流による顕著な乱れが認められる。遺構は検出されなかった。遺物は、2層から土師器片、須恵器片、陶磁器片、3層から土師器片、陶磁器片、6層から土師器片が若干出土した。

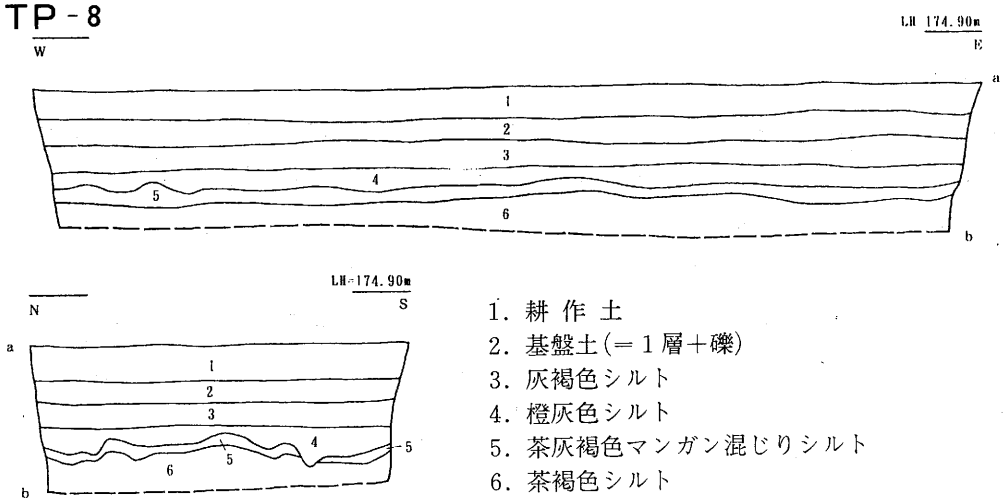
ＴＰ－9

標高174.7mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。層位は、1層－耕作土、2層－基盤土、3層－暗灰色シルト、4層－橙褐色礫を含む暗橙灰色シルト、5層－橙灰色シルト、6層－暗灰褐色シルト、7層－茶灰褐色シルト、8層－橙灰色シルト、9層－茶灰色シルト、10層－灰褐色シルトである。3層以下が氾濫堆積層である。遺物は、1層から土師器片、陶器片、4層から土師器片、6層から須恵器片が若干出土した。遺構は検出されなかった。

ＴＰ－10

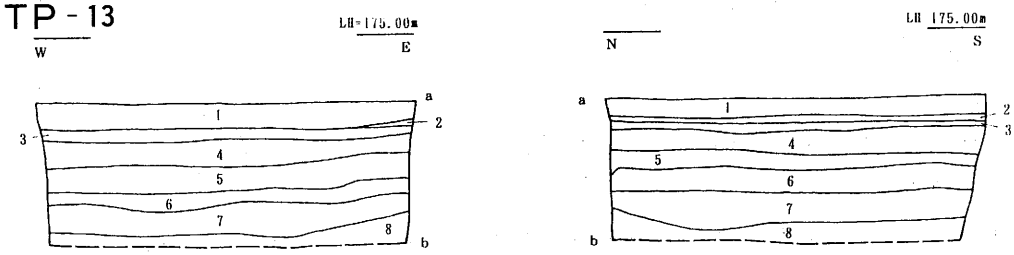
標高174.8mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。層位は、1層－耕作土、2層－基盤土、3層－灰色シルト、4層－マンガン分沈着橙灰色シルト、5層－礫分混じり黄灰色シルト、6層－茶灰色シルト、7層－茶灰色砂、8層－礫混じり灰褐色砂である。3層以下が氾濫堆積層である。遺物は、2層から土師器片、陶磁器片が微量出土した。遺構は検出されなかった。

TP－8



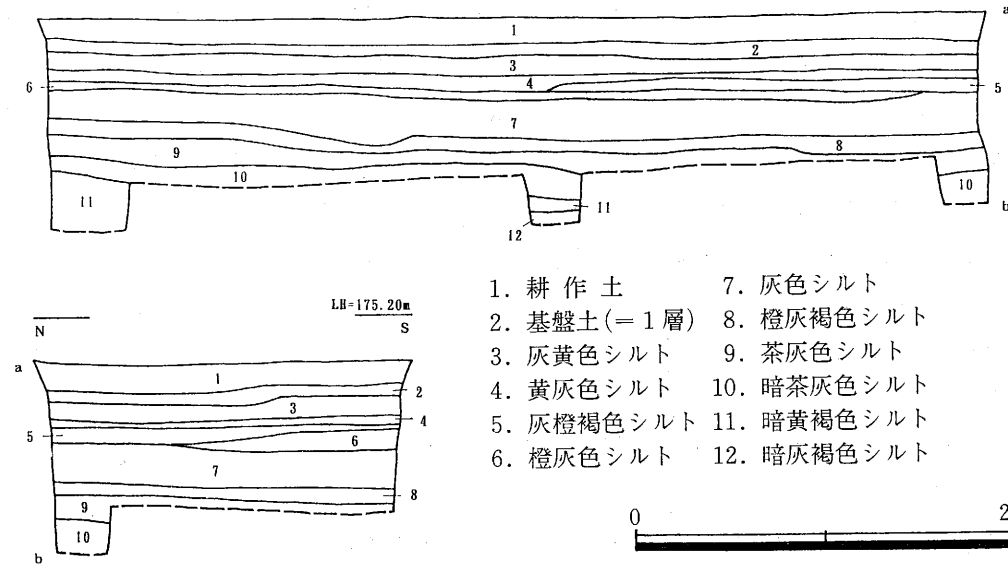
1. 耕 作 土
2. 基盤土(＝１層＋礫)
3. 灰褐色シルト
4. 橙灰色シルト
5. 茶灰褐色マンガン混じりシルト
6. 茶褐色シルト

TP－13



1. 耕 作 土
2. 灰色粘質土
3. 黄灰色シルト
4. 灰褐色シルト(マンガン分沈着)
5. 灰褐色シルト
6. 淡青灰色シルト(遺物包含層)
7. 灰茶褐色シルト
8. 灰褐色シルト混じり細砂(マンガン分を含む)

TP－15



1. 耕 作 土
2. 基盤土(＝１層)
3. 灰黄色シルト
4. 黄灰色シルト
5. 灰橙褐色シルト
6. 橙灰色シルト
7. 灰色シルト
8. 橙灰褐色シルト
9. 茶灰色シルト
10. 暗茶灰色シルト
11. 暗黄褐色シルト
12. 暗灰褐色シルト

0　2m

第12図　テストピット実測図（ＴＰ－8・13・15）

ＴＰ－11

標高174.8mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。ＴＰ－10と同一の田地内である。層位は、1層－耕作土、2層－基盤土、3層－灰褐色シルト、4層－灰黄褐色シルト、5層－橙灰褐色シルト、6層－淡青灰色シルト、7層－マンガン分沈着茶褐色シルト、8層－茶褐色シルト、9層－茶灰色シルト、10層－礫混じり灰褐色砂であり、2～3層に穿たれた形で11層－青灰色粘質土（杭痕）、8層中のブロックとして12層－橙褐色シルトが観察される。3層以下が氾濫堆積層である。杭痕は現水田に伴うものと思われ、これ以外に遺構は検出されなかった。遺物は、2層から土師器片が微量出土した。

ＴＰ－12

標高174.7mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。層位は、1層－耕作土、2層－基盤土、3層－暗黄灰色シルト、4層－黄灰色シルト、5層－黄灰褐色シルト、6層－暗黄灰褐色シルト、7層－茶褐色シルトである。3層以下が氾濫堆積層である。遺物は、出土層位不明だが須恵器片が微量出土した。遺構は検出されなかった。

ＴＰ－13（第12図）

標高174.6mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。3層以下が氾濫堆積層となる。遺構は検出されなかった。遺物は、6層から土師器片が若干出土した。

ＴＰ－14

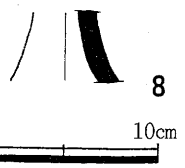
標高174.9mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。層位は、1層－耕作土、2層－基盤土、3層－灰色シルト、4層－黄灰色シルト、5層－マンガン分沈着橙茶褐色シルト、6層－茶灰色シルト、7層－暗茶褐色砂礫、8層－茶褐色砂礫、9層－礫混じり茶褐色砂質土である。3層以下が氾濫堆積層で、5、6層の上下端のセクションラインは大きなうねりを示す。現水田に伴うものと思われる杭痕が2層中から打ち込まれているほかに、遺構は検出されなかった。遺物は、3層から須恵器片、陶磁器片、銅製のかんざし、4層から須恵器片、陶器片、6層から須恵器片が微量出土している。

ＴＰ－15（第12図）

標高174.9mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。ＴＰ－14と同一の田地内である。3層以下が氾濫堆積層となる。遺構は検出されなかった。遺物は、4層から土師器片、陶器片、5層から磁器片が若干出土した。

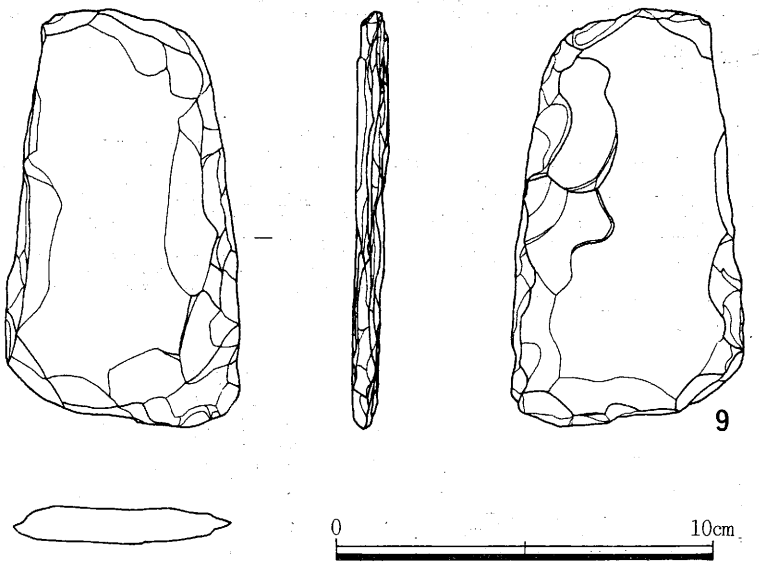
ＴＰ－16（第13、14図）

標高175.3mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。層位は、1層－耕作土、2層－基盤土、3層－灰色シルト、4層－灰褐色シルト、5層－マンガン分沈着橙灰褐色シルト、6層－暗茶灰



第13図　TP-16出土遺物

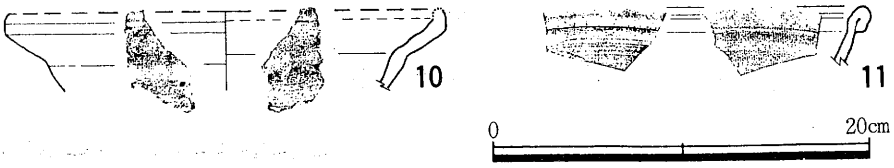
褐色シルト、7層ー茶灰色シルト、8層ー橙褐色シルト、9層ー茶灰褐色シルトである。3層以下が氾濫堆積層であり、5〜7層を抉る氾濫流路の埋土として、10層ー橙灰色シルト、11層ーマンガン分沈着灰色シルト、12層ー暗茶灰色シルトが観察され、また、7層中のブロックとして、13層ー茶灰褐色シルト、8層中のブロックとして、14層ー淡茶灰色シルトが観察される。遺構は検出されなかった。遺物は、4層から土師器片、須恵器片、5層から土師器片、須恵器片、7層から土師器片が若干出土し、9層から打製石斧1点と土師器片がややまとまって出土したが、図示できるものは少なかった。第13図8は、5層から出土した須恵器の高坏の脚部である。第14図は、9層から出土した打製石斧である。重量119gを測る。



第14図　ＴＰ－16出土遺物

ＴＰ－17（第15、16図）

標高175.5mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。今回調査範囲の最北端に位置する。3層以下が氾濫堆積層となる。遺構は検出されなかった。遺物は、3層から須恵器片、瓦質土器片、陶磁器片、4層から陶器片、6層から須恵器片、陶器片、8、9層から土師器片が若干出土した。第15図は、3層出土遺物である。10は瓦質土器の鍋で、外面ナデ調整、内面ハケ調整を施している。口縁端部をわずかに欠いている。11の陶器は卸目を観察できない破片

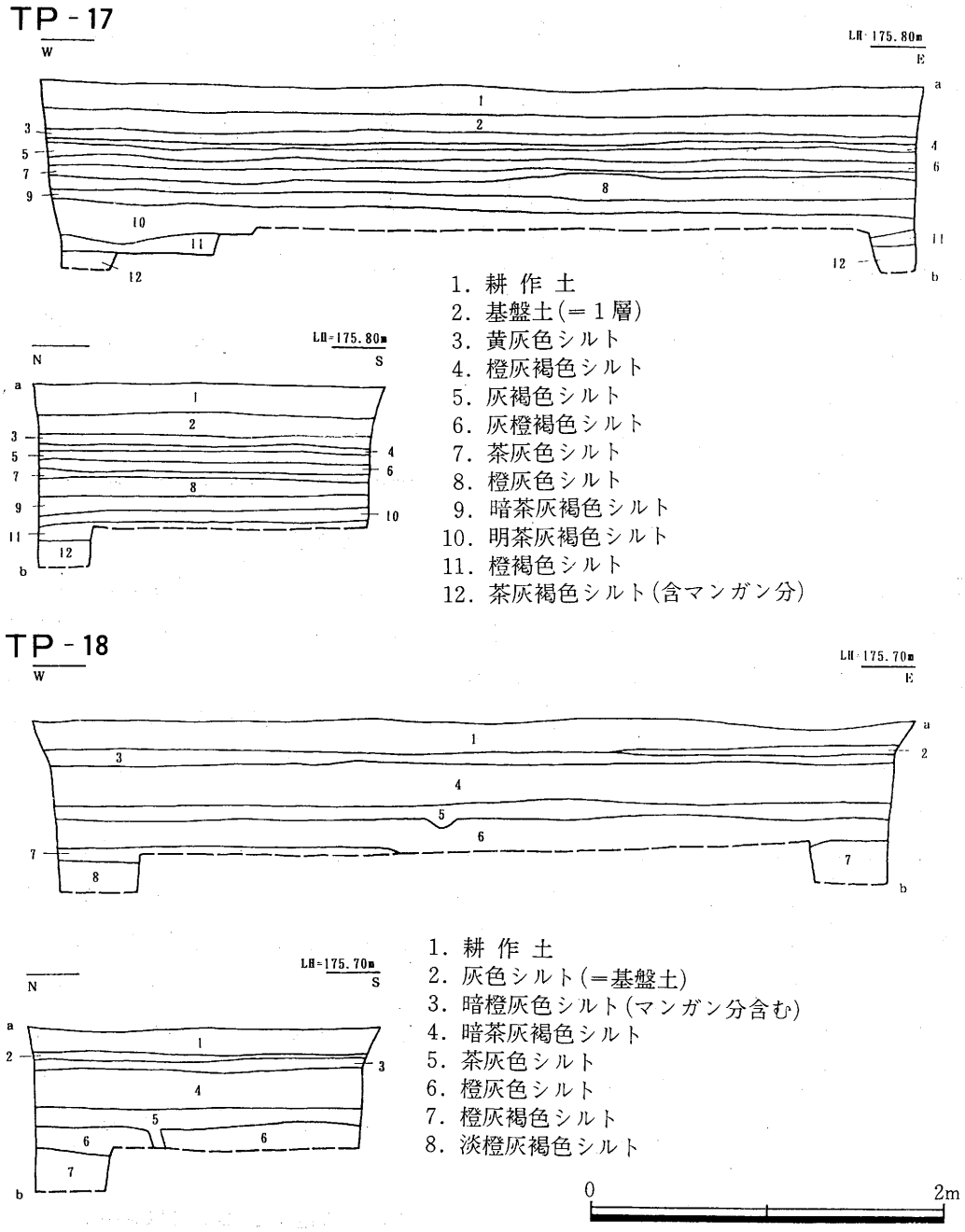


第15図　ＴＰ－17出土遺物

だが、擂鉢の口縁部である。口縁部を折り返し、突帯としている。

ＴＰ－18（第16図）

標高175.3mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。3層以下が氾濫堆積層とな

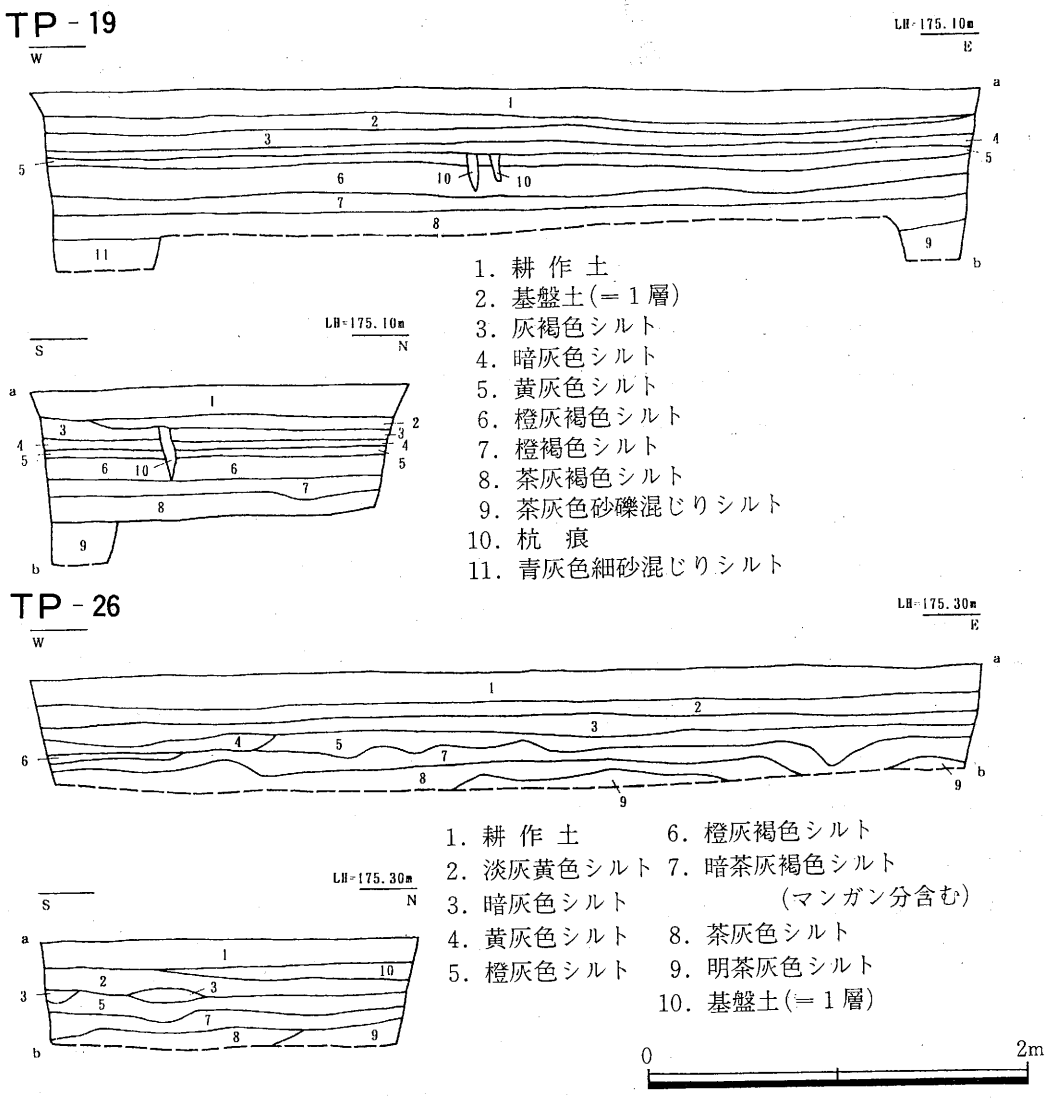


第16図　テストピット実測図（ＴＰ－17・18）

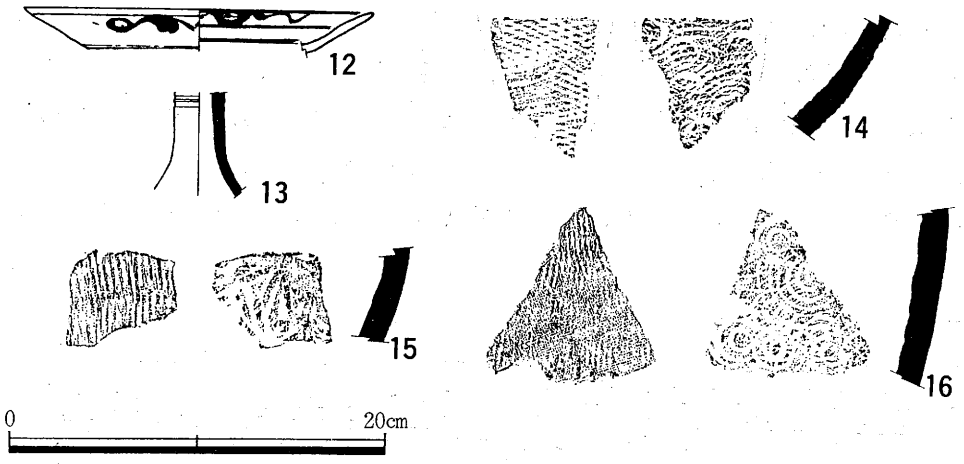
る。遺構は検出されなかった。遺物は、2層から須恵器片、陶器片、3層から土師器片、須恵器片が若干出土している。

ＴＰ－19（第17、18図）

標高174.9mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。3層以下が氾濫堆積層となる。杭痕以外、遺構は検出されなかった。遺物は、4層から須恵器片、陶磁器片、トチン、5層から須恵器片が出土している。第18図は13が5層出土、それ以外は4層出土である。12は、



第17図　テストピット実測図（ＴＰ－19・26）



第18図　ＴＰ－19出土遺物

伊万里系と思われる染付けの皿である。釉が厚くかかっており、焼成不良で陶胎気味である。13は、須恵器の高坏の脚部片である。2条の沈線が施されている。14～16は、須恵器の甕の胴部片である。14と16は、外面平行タタキ、内面同心円タタキで、15は外面平行タタキ、内面放射状タタキが観察される。

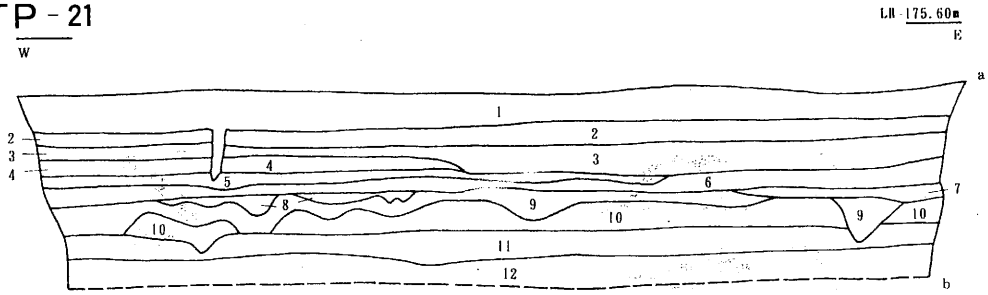
ＴＰ－20

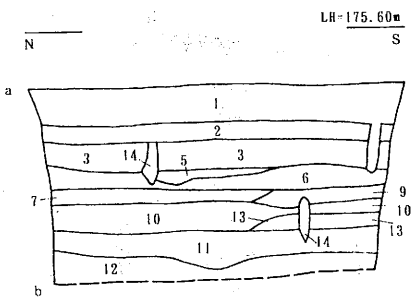
標高175.0mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。層位は、1層－耕作土、2層－基盤土、3層－黄灰色シルト、4層－橙灰色シルト、5層－マンガン分沈着暗茶灰褐色シルト、6層－茶灰褐色シルト、7層－砂礫混じり暗灰褐色シルト、8層－暗茶褐色細砂、9層－黄灰色細砂である。3層以下が氾濫堆積層であり、3、4層を抉る氾濫流路の埋土として、10層－淡灰黄色シルト、11層－淡橙灰色シルトが観察される。また、6層と7層の接線のラインが大幅に乱れており、氾濫の様子を顕著に示している。杭痕以外、遺構は検出されなかった。遺物は、2層から須恵器片、陶磁器片、3層から須恵器片が出土している。

ＴＰ－21（第19、20図）

標高175.2mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。3層以下が氾濫堆積層となる。杭痕以外、遺構は検出されなかった。遺物は、3層から須恵器片、4層から土師器片、須恵器片、陶器片、鉄片、5層から土師器片、須恵器片、キセル片、6層から土師器片、須恵器片、陶器片、7層から土師器片、須恵器片、9層から須恵器片、10層から土師器片が出土している。特に、6、7層からの須恵器の出土量は多く、破片数にして160を数えた。第20図は、24と26が6層出土、それ以外は7層出土で、いずれも須恵器である。17～20は、蓋である。17は他の蓋に比してやや大型で、つまみの有無を確認できない。短頸壺の蓋の可能性もある。

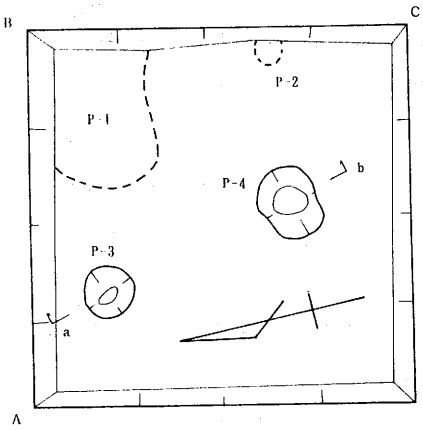
TP－21

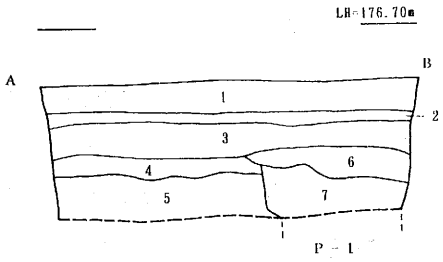


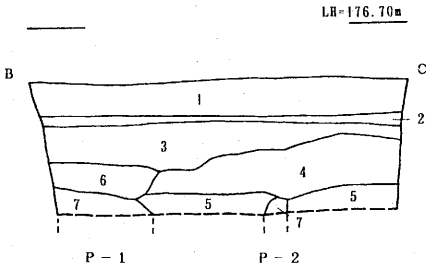


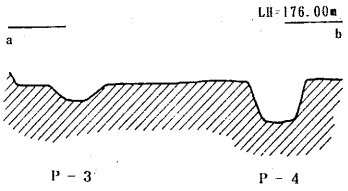
1. 耕 作 土
2. 基 盤 土
3. 橙灰色シルト(礫を含む)
4. 茶灰色シルト
(遺物包含層)
5. 茶灰褐色シルト
(遺物包含層)
6. 暗灰色シルト
(遺物包含層)
7. 黒 色 土
8. 淡橙灰色シルト
9. 暗橙灰褐色シルト
(マンガン分含む)
10. 橙灰褐色シルト
11. 暗灰褐色シルト
12. 灰褐色シルト
13. 橙褐色シルト
14. 杭 痕

TP－22





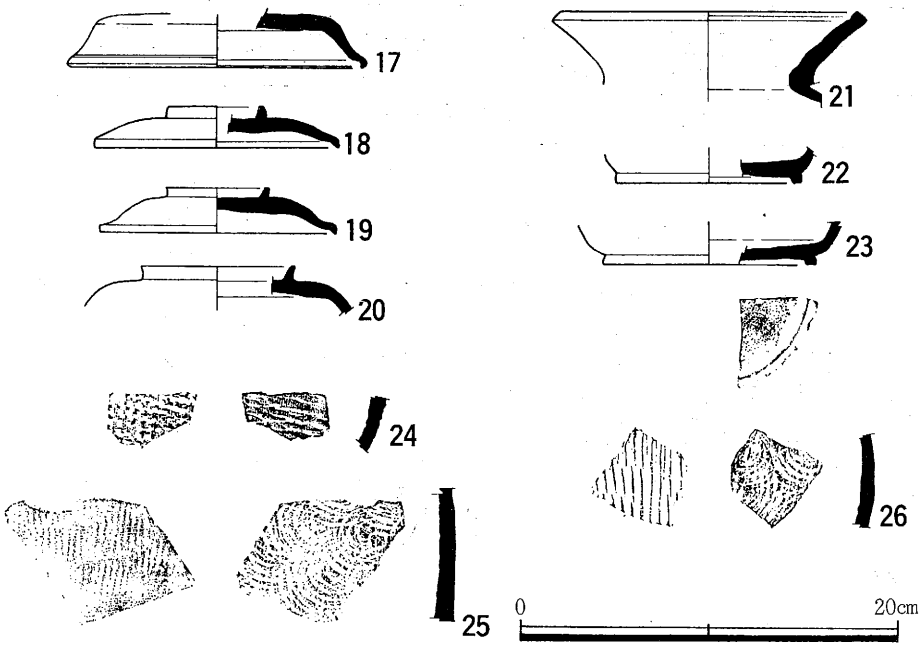




1. 耕 作 土
2. 基盤土(マンガン分含む)
3. 茶褐色土
4. 暗茶褐色土
5. 黄茶褐色土(地山)
6. 淡茶褐色土(礫を含む)
7. 暗茶灰褐色シルト
(マンガン分含む)

0 2m

第19図　テストピット実測図（ＴＰ－21・22）

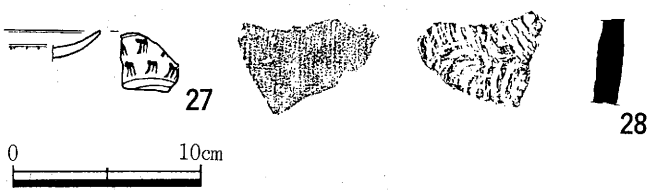


第20図　ＴＰ－21出土遺物

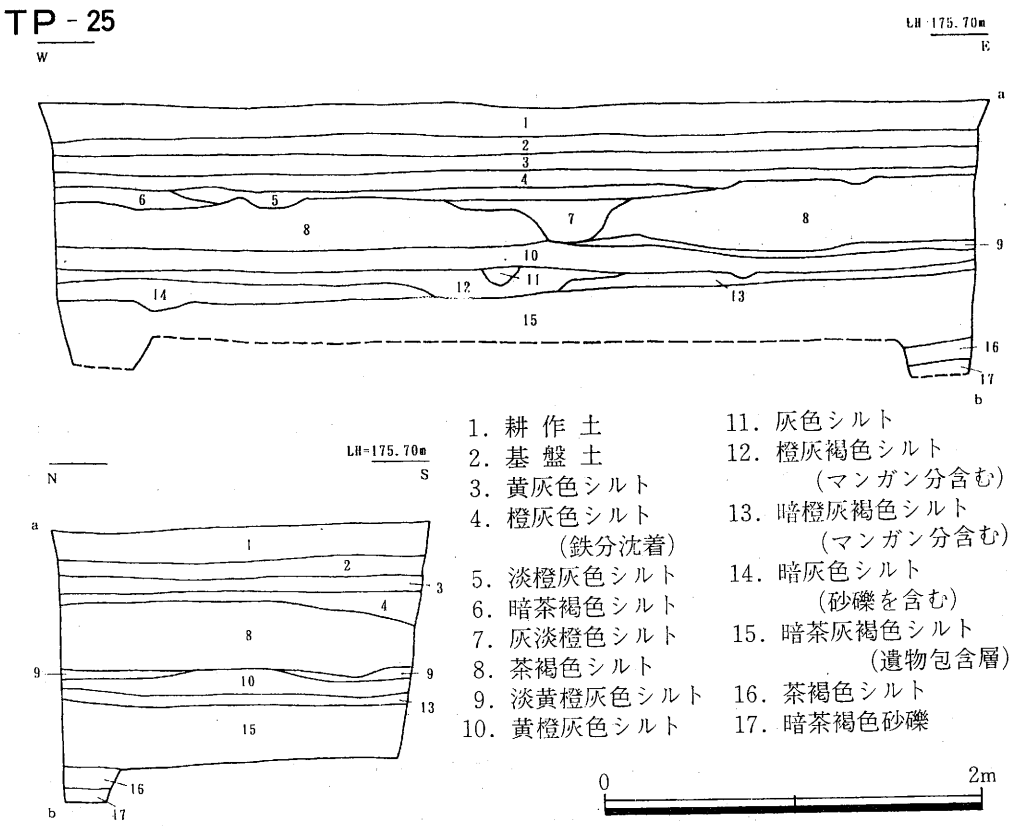
18～20は輪状つまみを有する坏蓋で、22、23は高台を有する坏である。21は甕の口縁部、24～26は甕の胴部片である。24は外面格子目タタキ、内面同心円タタキ、25、26は外面平行タタキ、内面同心円タタキで、25の外面にはカキメが観察される。

ＴＰ－22（第19、21図）

標高176.3mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。調査範囲中最高位に位置し、最も近隣のＴＰ－21とは、1mの比高差がある。他のテストピットとは土層の状況が異なってシルト層の堆積はみられず、氾濫の影響を被らない安定した層序を示している。遺構は、3層中または4層中から掘り込まれたピットが4基検出され、うち2基は柱穴状であった。遺物は、2層から須恵器片、陶器片、3層から須恵器片、磁器片、4層から土師器片、須恵器片、瓦質土器片、陶磁器片、7層から土師器片が出土している。3、4層からの須恵器の出土量が若干多いようである。遺構からの出土はみられなかった。第21図は、3層からの出土遺物である。27は明代の染め付け磁器で、皿



第21図　ＴＰ－22出土遺物

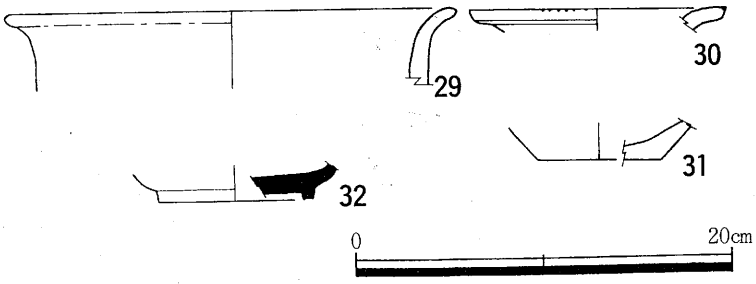


第22図　テストピット実測図（ＴＰ－25）

形をなすものと思われる。28は須恵器の甕の胴部片で、外面格子目タタキ、内面同心円タタキが観察される。

ＴＰ－25（第22、23図）

標高175.3mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。ＴＰ－16と同一の田地内である。3層以下が氾濫堆積層である。7層と8層の識別は漸移的なものであり、7層は氾濫による流水の痕跡と思われる。遺構は確認していない。遺物は、2層から土師器片、須恵器片、陶磁器片、3層から土師器片、須恵器片、10層から土師器片が出土した。15層からは約100片の弥生土器と思われる破片が出土した。図示できるものは少なく、全て摩



第23図　ＴＰ－25出土遺物

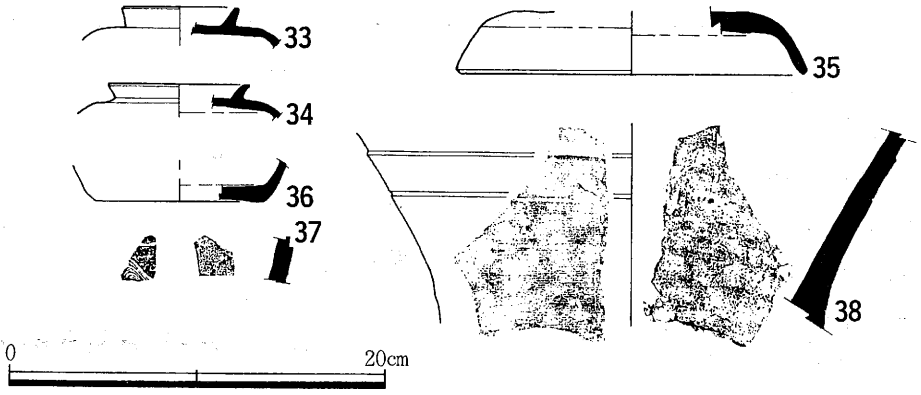
滅を受けている。第23図の29〜31は、15層出土の弥生土器である。29は浅く「く」字形に外反する甕である。30は口縁端部に刻み目を施すもので、31は底部である。32は、3層出土の須恵器の坏である。

ＴＰ－26（第17、24図）

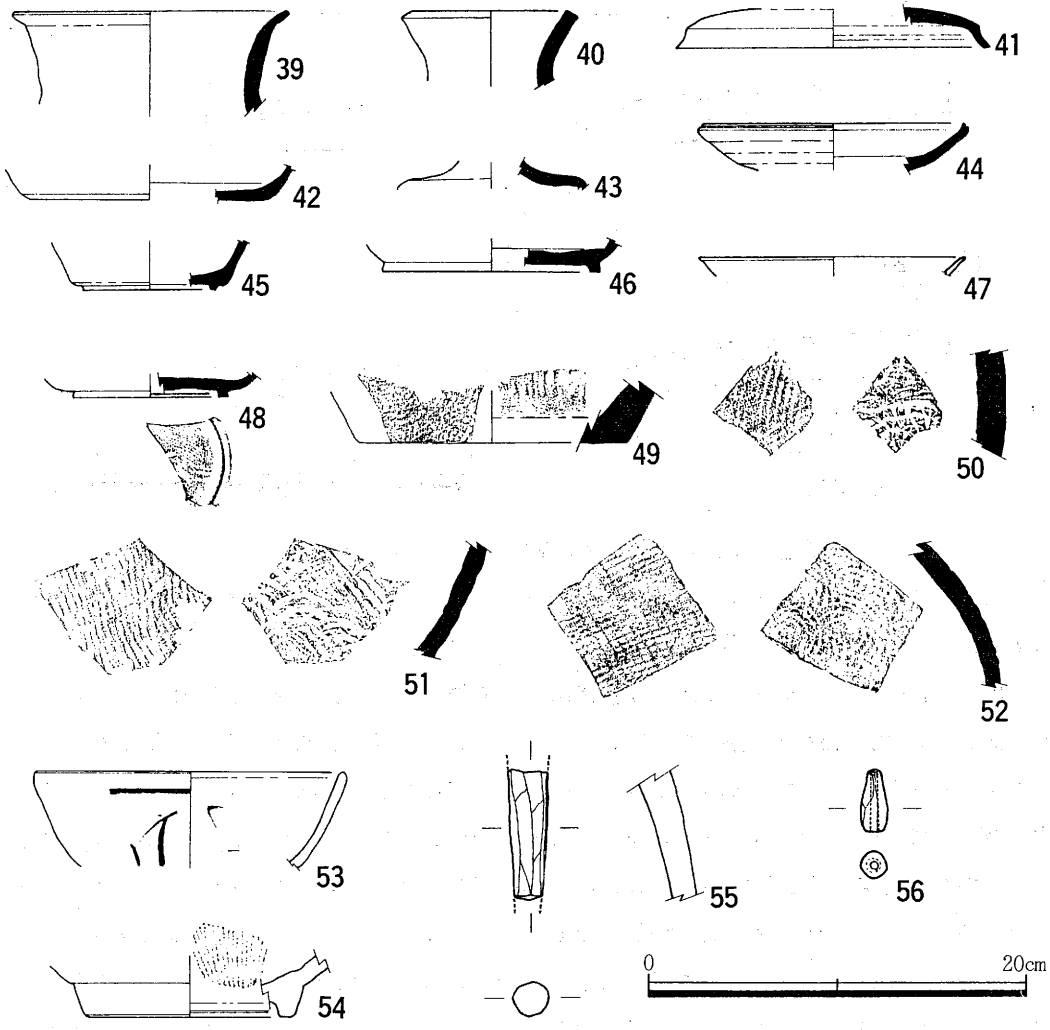
標高175.0mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。ＴＰ－20と同一の田地内である。2層以下が氾濫堆積層である。遺構は確認していない。遺物は、2層から土師器片、須恵器片、陶器片、トチン、3層から須恵器片、陶器片、トチンが出土した。3層からの須恵器片の出土が顕著で、約70片を数えた。第24図の33は2層出土、他は3層出土で、いずれも須恵器である。33、34は輪状つまみを有する坏蓋である。35は比較的大型の蓋で、口径18.1cmを測る。36は坏の底部である。37、38は甕の頸部で、37には波状文が観察され、38には沈線文と段がみられる。

ＴＰ－27

標高175.5mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。ＴＰ－17と同一の田地内である。層位は、1層－耕作土、2層－基盤土、3層－灰色シルト、4層－黄灰色シルト、5層－灰褐色シルト、6層－鉄分沈着灰褐色シルト、7層－マンガン分沈着灰褐色シルト、8層－茶灰褐色シルト、9層－茶灰色シルト、10層－明橙灰色シルト、11層－細砂混じり灰橙色シルト、12層－砂礫混じり灰色シルト、13層－淡橙灰褐色シルトである。3層以下が氾濫堆積層である。遺構は検出されなかった。遺物は、2層から土師器片、須恵器片、陶磁器片、8層から土師器片が出土している。



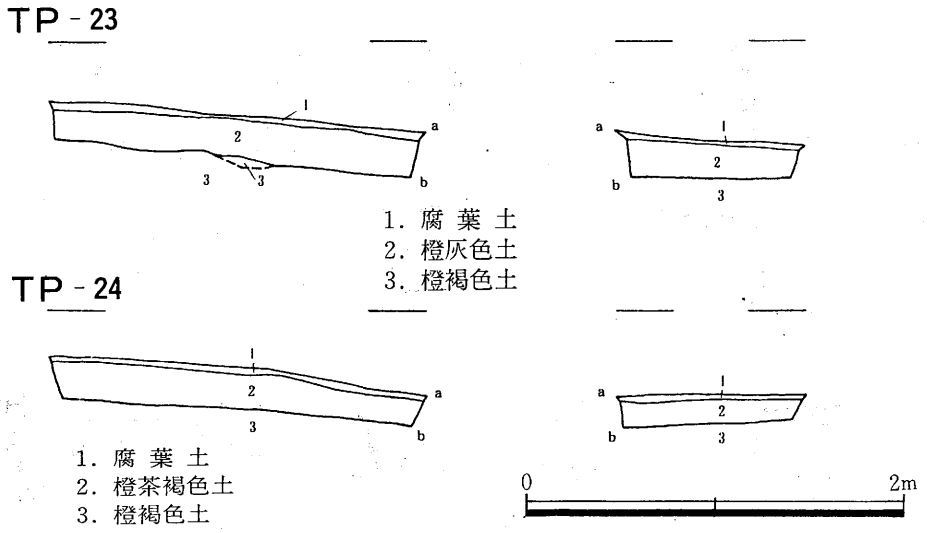
第24図　ＴＰ－26出土遺物



第25図　ＴＰ－28出土遺物

ＴＰ－28（第25図）

標高175.2mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。ＴＰ－21と同一の田地内である。層位は、1層－耕作土、2層－基盤土、3層－橙灰色シルト、4層－暗灰色シルト、5層－茶灰褐色シルト、6層－灰色シルト、7層－マンガン分沈着暗茶灰褐色シルト、8層－マンガン分沈着橙灰褐色シルト、9層－茶灰色シルト、10層－暗茶褐色シルト、11層－明橙灰色シルトである。3層以下が氾濫堆積層である。遺構は検出されなかった。遺物は、2層から土師器片、須恵器片、陶磁器片、3層から須恵器片、陶磁器片、4層から土師器片、須恵器片、瓦質土器片、陶磁器片、5層から土師器片、須恵器片、瓦質土器片、陶磁器片、土錘、6層から土師器



第26図　テストピット実測図（ＴＰ－23・24）

片、須恵器片が出土している。特に須恵器の出土が顕著であり、4～6層にかけて約230片が出土している。第25図は、46、50が3層出土、39、43、45が4層出土、40、42、47、53～56が5層出土、41、44、48、49、51、52が6層出土の遺物である。39～46、48～52は須恵器である。39、40、43、49は壷の各部で、39、40は口頸部、43は肩部、49は平底の底部である。49の外面は格子目タタキで、内面には粗いハケ調整がみられる。41は蓋である。端部が内湾気味に外反している。42、44～46、48は坏である。42、44は高台をもたないもので、44は口縁端部に1条の沈線が施されている。45、46、48は高台を有するもので、48の底部には糸切り痕が観察される。50～52は、甕の胴部片である。50の外面は平行タタキ、内面は放射状タタキで、51の外面は平行タタキ、内面は同心円タタキ、52の外面は格子目タタキで、内面は同心円タタキである。47は緑釉陶器の小片である。碗形と思われ、釉は極めて薄い。53は青磁の碗である。内外面に草花文が施され、釉は淡緑色に発色している。54は擂鉢で、高台を有するものである。55は土師質の足鍋の脚で、粗く面取りされている。56は土師質の土錘で、重量5ｇを測る。

(2) Ｂ区の概要（第6図）

高田集落の北側に伸びる支丘上が対象地である。標高216ｍの頂き付近に2ヶ所のテストピットを設定した。現況では、頂上付近まで尾根が階段状に大幅に削平されており、遺構の遺存の可能性は低いものと思われた。

ＴＰ－23、24（第26図）

いずれも2×1ｍのテストピットである。遺構、遺物は共に検出されなかった。

Ⅳ．小　　結

今回の調査では、Ａ区26ケ所、Ｂ区２ケ所のテストピットを設定した。Ａ区では、ＴＰ-22からピットを検出したほかは、遺構は確認されなかった。調査地の大半は氾濫原であり、生活域として不適当な環境にあることは、シルト層の厚い堆積からもみてとれる。遺構の存在を推察し難い状況ではあるが、全てのテストピットから遺物の出土がみられた。氾濫による流れ込みではあるが、遺物包含層が一面に広がっていることは確実である。ＴＰ－22の南側に設定されたＴＰ－19～21、26、28の５ケ所のテストピットからは、ＴＰ－22側からの流れ込みと思われる須恵器の出土が特に顕著であった。これらのテストピットより北西側は旧来鴻寄遺跡と称された遺物散布地で、ＴＰ－22を設定した田地あたりで周辺より1m以上も急激に高くなっている。ＴＰ－22で検出された遺構は4基で、うち2基について掘り下げを行ったところ、柱穴状のピットであることを確認した。あとの2基については、検出面の状況から1基は柱穴状のピット、もう1基は土坑状を呈するものと思われる。遺物散布の密度からも、ＴＰ－22より北西側の高位部に遺跡地が広がっていることが推察されよう。この遺跡の年代として、ＴＰ－19～21、26、28から多量に出土した須恵器の年代を当てはめるとすれば、平安時代前期頃を主体とする時期といえる。第20、24図に掲げたような輪状つまみを有する坏蓋の年代観については、石見地方では8世紀末～9世紀前半という見解が一般的である。また放射状タタキの石見部での類例として、那賀郡旭町重富遺跡例が知られるが、ほぼ同様な年代的位置付がなされている。緑釉陶器については、小片でもあり、時期を判断するに至らなかったが、概ね平安時代前期より遡ることはないであろう。他の須恵器も概ね時期を等しくするものと考えられる。

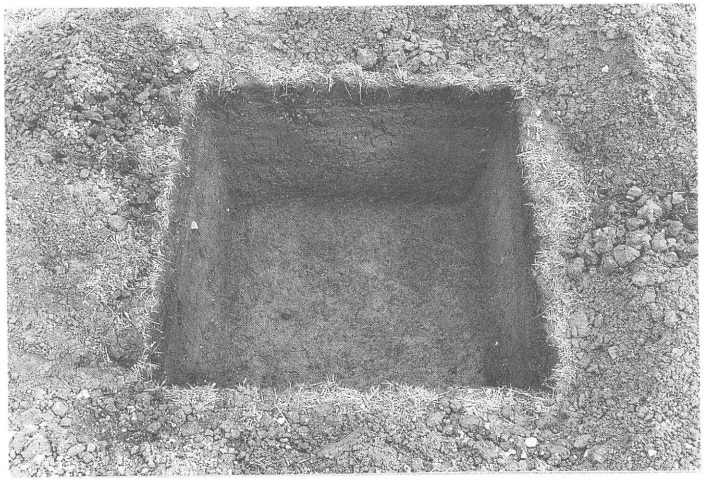
Ｂ区は、古墳、砦等の遺構の存在が予測される立地ではあったが、尾根の大幅な削平のためか、遺構、遺物は確認されなかった。なお、周辺を踏査した際に道祖神を確認した。第6図、ＴＰ－24の北東側の道端に∴で示した地点である。古来、この山道において活発な往来があったことを偲ばせるものである。

高田遺跡分布調査ＴＰ一覧表

地区	ＴＰ番号	調査規模（m×m=㎡）	遺　構	出　土　遺　物
A区	1	5×2=10		土師器、須恵器、磁器
	2	2×2= 4		須恵器、陶磁器
	3	2×2= 4		土師器、瓦質土器、陶磁器
	4	2×2= 4		土師器、陶器
	5	5×2=10		土師器、青磁、陶磁器
	6	5×2=10		土師器、須恵器、青磁、陶磁器
	7	5×2=10		土師器、青磁、陶磁器
	8	5×2=10		土師器、須恵器、陶磁器
	9	5×2=10		土師器、須恵器、陶器
	１０	2×2= 4		土師器、青磁、陶器
	１１	2×2= 4		土師器
	１２	2×2= 4		須恵器
	１３	2×2= 4		土師器
	１４	5×2=10		須恵器、陶磁器、かんざし
	１５	5×2=10		土師器、陶磁器
	１６	2×2= 4		土師器、須恵器、石斧
	１７	5×2=10		土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、陶磁器
	１８	5×2=10		土師器、須恵器、陶器
	１９	5×2=10		須恵器、陶磁器、トチン
	２０	2×2= 4		須恵器、陶磁器
	２１	5×2=10		土師器、須恵器、陶器、鉄製品、煙管
	２２	2×2= 4	ピット４	土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器
B区	２３	2×1= 2		
	２４	2×1= 2		
A区	２５	5×2=10		弥生土器、土師器、須恵器、白磁、陶磁器
	２６	5×2=10		土師器、須恵器、陶器、トチン
	２７	2×2= 4		土師器、須恵器、陶磁器
	２８	5×2=10		土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、陶磁器、土錘
計		198㎡		

1．A区調査地遠景(北西から)

2．作 業 風 景



3．TP－4完掘状況(西から)

4．TP－6完掘状況(西から)

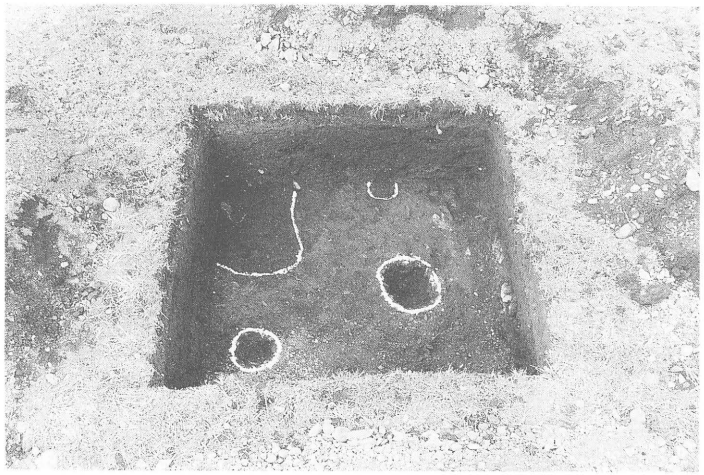
図版 1

1. ＴＰ－8遺物出土状況（西から）

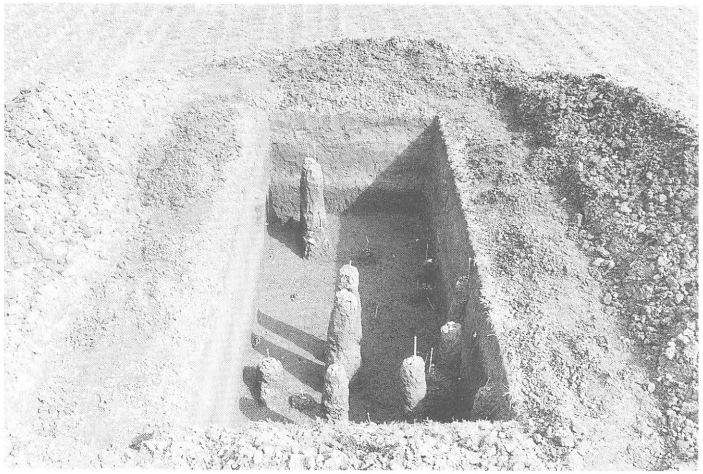
2. ＴＰ15－完掘状況（西から）

3. ＴＰ－17遺物出土状況（西から）

4. ＴＰ－21遺物出土状況（西から）



1．ＴＰ－22遺構検出状況（西から）



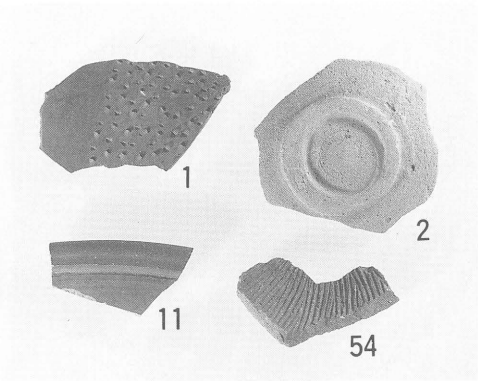
2．ＴＰ－25遺物出土状況（西から）

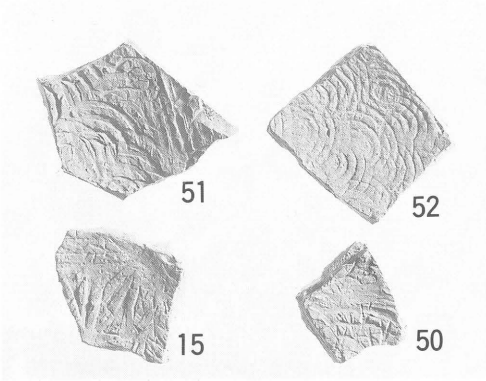
3．Ｂ区調査地遠景（東から・矢印が調査地点）

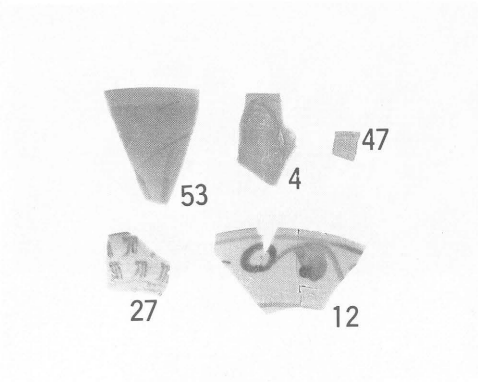
4．ＴＰ－23完掘状況（北から）

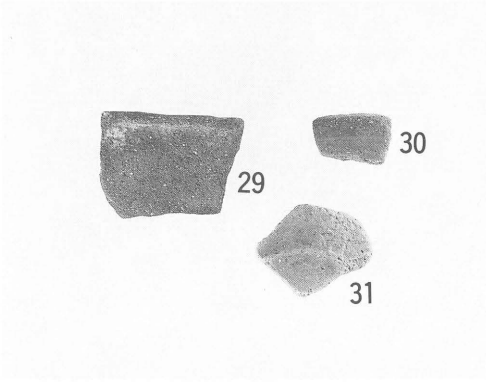
図版３

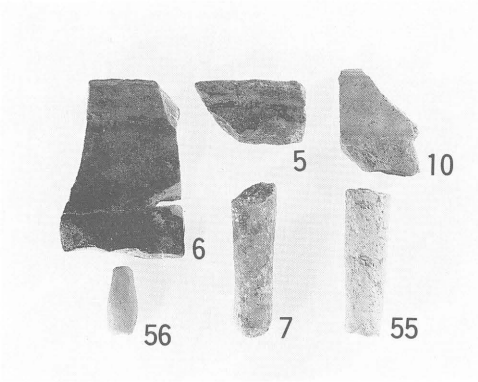
図版　4

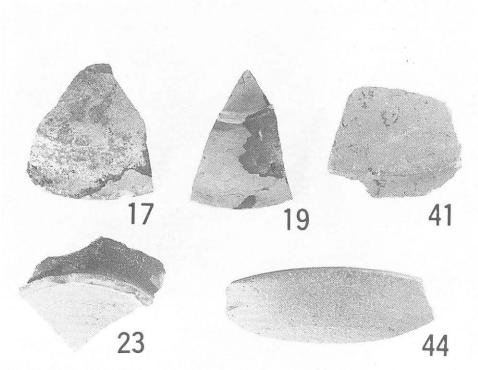












1 - 表採、　2 - ＴＰ 2 11 - ＴＰ17、54 - ＴＰ28	50～52 - ＴＰ28 15 - ＴＰ19
4-ＴＰ 6 、47･53-ＴＰ28 27 - ＴＰ22、12 - ＴＰ19	29～31 - ＴＰ25
5～7-ＴＰ7、10 - ＴＰ17 55・56 - ＴＰ28	9 - ＴＰ16
17・19・23 - ＴＰ21 41・44 - ＴＰ28	

津和野町埋蔵文化財報告書
高田地区埋蔵文化財分布調査概要報告書Ⅱ

平成４年３月　印刷・発行

編集・発行　津和野町教育委員会
TEL.(08567)2-0300

印　刷　所　津和野町（有)坂田印刷
TEL.(08567)2-0064